
闇の中に生きる蒼き雷龍とその‘女達’とその後・・・。

Natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の中に生きる蒼き雷龍とその‘女達’とその後・・・

【Nコード】

N5686R

【作者名】

N a t u

【あらすじ】

200X年の首都西都此処に闇の中で生きる蒼き雷龍と呼ばれる男がいた。

名を片倉小十郎。その男は闇の中でも、かなり有名、だった。表では、‘人間’^{ヒト}として生き

そして、闇の中では・・・純血の吸血鬼兼スナイパー（始末屋），だった。

と同時に小十郎を慕って周りに来る吸血鬼達。その中には、吸血鬼界の鬼、と呼ばれた鬼眼の狂がいた。

（その男もちろん純血）

そして……。ワカバ特捜部と言う組織にその吸血鬼達が、探しそして求めている少女達、……。いや、

‘女達’がいた。

ワカバ特捜部と言う組織のリーダー兼幹部の橘夏美。

彼女は嘗て、人間としてありながら闇に生きた闇の始末屋炎龍、として活動していた。

そして嘗ては、幼少の頃若き日の小十郎、に懐いていた。小さな少女だった。

一方、観音崎椿^{かんのんぎきつばき}ワカバ特捜部の一員でありながら、龍王崎家と同じ、特殊ダムピール、の観音崎家の娘で風を操る、風操り士、だった。

そして、沙代子と同時に狂に氣に入られている一人。

そして、夏美の、過去を知る、相棒ライカ・ネアン。

と同時に、炎龍、時代の夏美に、執着する、龍^{ドラゴン}そして・・・。

彼らが、動くと同時に彼女らをまた闇へと誘う。

必読。(お手数ですがお読みください) (前書き)

此方は前回の短編「闇の中に生きる蒼き雷龍」の続きみたいなものです。

ネタが浮かび次第の投稿となりますので・・もしかしたら此方も完結まで時間が大変にかかると思いますがどうぞ暖かい目で今後とも見守って頂ければ幸いです。

有難うございます。

必読。（お手数ですがお読みください）

今回も片倉さんが「吸血鬼」設定です。

後今まで出てきたワカバの2人組の設定は代わりませんが・・・基本的に。

ですが、ワカバの組織自体の名は此处では少々変わります。「ワカバ特捜部」です。

一応、中立派は変わらず・・・後あらすじ等にも書かせて頂きましたが「色々な組織の監視者」という立場になっております。

他の戦国BASARAキャラも多分出演予定ですが・・・狂さん所も。

基本的に「吸血鬼」設定で残酷シーン等あり予定の程をご理解とご了承のほどよろしくお願い致します。

って基本的に作者は戦もん好きなのでそう言うのしか書きません（笑；；；）

その辺もご了承ください。

其れでは此方も時間が沢山かかると思いますがどうぞ暖かい目で見
て頂ければと思います。

此処まで読んで頂きありがとうございます。もしまた何かありまし
たら付け加えさせていただきます。

必読。完。

必読。(お手数ですがお読みください) (後書き)

此方でもご覧いただきありがとうございます。

時間かかるとは思いますがどうぞこちらも宜しくお願い致します。

其れでは次章でお会い致しましょう。

第1夜。プロログ。ワカバ特捜部。（前書き）

有難うございます。

短編の続きみたいなのです。

短編に付け加えさせて頂くかも知れません。

第1夜。プロローグ。ワカバ特捜部。

200X年の首都西都此処に闇の中で生きる蒼き雷龍と呼ばれる男がいた。

名を片倉小十郎。その男は闇の中でも、かなり有名、だった。表では、人間、として生き

そして、闇の中では・・・純血の吸血鬼兼スナイパー（始末屋）、だった。

と同時に小十郎を慕って周りに来る吸血鬼達。その中には、吸血鬼界の鬼、と呼ばれた鬼眼の狂がいた。

（その男もちろん純血）

そして・・・ワカバ特捜部と言う組織にその吸血鬼達が、探しそして求めている少女達、・・・

いや、女達、がいた。

ワカバ特捜部と言う組織のリーダー兼幹部の橘夏美。

彼女は嘗て、人間としてありながら闇に生きた闇の始末屋炎龍、として活動していた。

そして嘗ては、幼少の頃若き日の小十郎、に懐いていた。小さな少

女だった。

一方、観音崎椿かんのんざきつばきワカバ特捜部の一員でありながら・・龍王崎家と同じ、特殊ダムピール’の観音崎家の娘で風を操る、風操り士’だった。

そして、沙代子と同時に狂に気に入られている一人。

そして、夏美の、過去を知る、相棒ライカ・ネアン。

と同時に、炎龍、時代の夏美に、執着する、龍ドラゴンそして・・・。

彼らが、動くと同時に彼女らをまた闇へと誘う。

此処は、西都の某ビルにあるワカバ特捜部。主に此処は中立派で・・管轄内などでいざこざそして

‘特殊ダムピール教会’を、監視する任務などさまざまな、闇の監視、する組織だ。

そしてその特捜部を率いる頭領が陳・オウガ（チェン・オウガ）夏美達の、良き兄貴分だ。

そして此処は1階にある喫煙所。

其処には此処のリーダーである。橘夏美がいた。

夏美は愛用のタバコマルボロブラックメンソールワンを懐から取り出し火をつけ吸い始めた。

と同時に、暗くなった風景を、窓から見る。

そして煙を口から吐き出しながら「……………」彼らの時間か？も
う。」と呟いた。

すると…………。

「夏美！。と男の声が夏美の頭の中にこだました。

夏美は驚いて振り向いたが……誰もいなくて「……………」気のせいかな？
」」と不思議そうに呟いた。

…………。待てよ？？「さっきの声、まさか…………？

蒼き雷の龍の刺青が左腕に刻まれてるオールバックの右ほほに刀傷がある黒いスーツなどに実を包んでいる男を思い出した。

そして不意打ちにか「……片倉様？」とその男の名を呼んだ。

だが、苦笑いし「……何女々事言っているんだい。私しやアは。」と己をあざ笑った。

……もう10数年位たっているんだ。もう私しやアの事何ざアきつと忘れられているさ。」と心の中で呟いた。

そしてタバコを再度口に加え直し吸い続けていた。

其れと同時に夏美を呼ぶ声がしてその声主に「……了解。今行くよ。」と言いタバコを灰皿にもみ消し

喫煙所を出ようとする。

そして……また……。

ー夏美ー

夏美はその声を聞き「・・・、また聞こえた？」あの方（片倉様）の声が？？？」そしてひとまず考えそして冷静に見極めていないことを確認し「・・・、私しやアの空耳さね。」と呟いた。

と同時に喫煙所を今度こそ後にした。

するとそのビルを外から見ている男がいた。雷龍と呼ばれている何と片倉小十郎本人だった。

ばれない程度に路地裏に隠れタバコに火を灯しそのビルを見てニヤリと笑いながら「・・・、こんな所に居やがったか。夏美。」と言った。

そして、心の中で・・・。

お前は、すでに俺がお前の事忘れているかと思っっているだろうが・・・、残念だなア俺はちゃんと覚えているぜ？、逃がすはずがねえだろうが。

なア・・・？夏美？ととても楽しそうに呟いていた。

そして「……、会いに行つてやるぜ?、待つてろよ?」そうも呟いた。

と同時に後ろから足音が聞こえ小十郎はその足音の主に気が付き「・狂か。」

すると黒髪の短髪に全身黒ずくめに包んだ首に陰陽の刺青を施した紅の瞳の男がやって来て小十郎を見て

ニヤリと笑い「よオ。此処にいたか?片倉の兄貴?」と同時に「・・何していたよ?」と聞き小十郎は

顎でワカバ特搜部のビルをクイッとやって狂も其れを見て何かを悟つて「あア。なるほどねエ。」とタバコに火を灯しながらニヤリと笑い言った。

其れと同時に小十郎達をちよいと離れた所から1人の男が見ていた。

そして冷や汗をかきながら「・・・オイオイ。マジかよ。ありやア片倉さん達じゃねエか。」

眠っていたんじゃないのか?????

もし、あの人達が本当に片倉さん達だったら多分姉御達（夏美と椿達）に会いに行くかも知れねエ。

こうしている場合じゃねエ汗急いで特捜部に戻らねえと!! そう呟きばれないようにその場をすばやく後にした。

と同時に小十郎がちらつと見てニヤリと笑い「・・・ライフエイン所の弟（小僧）か。」と呟いた。

そして特捜部の所に入って行く所を見て「・・・特捜部員か。」とも呟いた。そして狂を見て「・・・近いうちに会いに行くぜ?」
「集められるだけですかまわねエ。」
「集めておけ?」

狂はそれを聞いてニヤリと笑い「了解したぜ。兄貴。」そう言い片倉と共に闇の中にひとまず去って行った。

其れを見ていた女が入れ替えて此処に来て呟いて「・・・あア。マジかよ。あいつ（雷外）の言った通りになっちゃったじゃねエか。」
とタバコに火を灯し呟きさらに続けて「こりゃア・・・会いに来るかも知れねエ汗、相棒達に。」

あァ・・・何か面倒な事お気なきやァ良いが。と心の中で再度呟き特捜部に戻った。

夏美の相棒兼馴染みのライカだった。弟分から聞いて様子を見ていたのだ。

夏美の過去を知る人物の1人。

そしてライカ軽くため息をつき「・・・頼むから相棒をそっとしておいてやって下さいよ？」片倉の旦那様。」と呟いた。

其れも寂しそうに。そして窓から空を見て「・・・今日はアレか？」「満月が何故か紅いな。」とも呟いた。

そしてライカは再度タバコに火を灯しつつ「・・・また彼ら（吸血鬼）達の時間か。」と続けて

「・・・奴ら（特殊ダムピール討伐教会）、も動くか？」とも呟いた。

するとライカを遠目で見ていた1人の女がいたクスクス笑い「・・・ライカちゃんみつけ♪」

元氣そうでなによりね。とも呟いた。

すると、ライカは一瞬、その気配に気づき、気配の方向を見た。だが其処には誰もいなかった。

ライカはタバコを口に加え直して「・・・まさかな。」と共に、あいつが居る訳がねエ。」とも心の中

で呟いた。

すると、殺氣がライカの周りに充満した。」

ライカは慌てて特捜部から外に出てきた。武器である氷棒を持ってそして「・・・其処にいるのは分かってんだ。出てきな?」アンタら特殊ダムピール討伐教会の連中だろう?」と殺氣の方面に向かって言い放った。

するとシスター服を着た女と黒ずくめの神父達が出て来た。

ライカ其れを見て軽く舌打ちし「・・・シスターアエラ。特殊ダムピール教会の、特別討伐部隊か。」

・・厄介なもんが出て来たぜ。まったく。

そしてシスターアエラと呼ばれた短髪の黒髪の女がライカの前に現れ「久しいですね。ワカバ特捜部の死神ライカ・ネアン。私達が此処に来た訳はもうご存知ですよね？」

ライカ皮肉にも笑い「・・・どうせ、うちの所の特殊組、を排除しに来たんだろ？」

アエラは頷き「御明察ですわ。特殊は、とても危険因子です野蛮です。すぐ様排除致します。」

其れを聞いたライカは顔しかめてアエラを睨みつけて「・・・そいつは悪イが出来ねえな。」ワカバ特捜部は、あいつ等を異端児としては見てねエ相棒として見てる！、アンタらの掲げている正義、に対しては出すわけにもいかねエんでな！！」

アエラはタメ息をつき「・・・致し方ありませんわね。本来なら手

荒なまねは好まないんですが。’」と

神父達に合図してライカに攻撃をさせた。

と同時に「ちよいと待ったアア！！！」「そう言いライカの前に現れる夏美。

ライカ驚き「相棒（夏美）！！」と同時に翡翠刀で神父達をなぎ倒しアエラを見て「・・・此処は、うちらワカバの特捜部の管轄内だ。アンタらの好きにはさせねえな。’」と睨みつけそしてライカを見て「相棒。此処は、任せな。’^{あにやま}兄様がお呼びだよ。」と小声で言う。

ライカはそれを聞いて頷き「・・・頼んだ。」「そう言いすばやく消えて特捜部に戻った。

そして夏美は翡翠刀を肩に載せ「・・・さあてと。管轄内で暴れて（遊んで）くれちゃいそうになったんだから。リーダーである私しやアがお相手するよ。そんなに、暴れたかったらね。’」「そう言いアエラ達を見た。

と共に軽くアエラタメ息「・・・参りましょう。皆さん。彼女が出てきたらひとまず私達に勝ち目は有りません。’」「そう言い神父達に声をかけ夏美をみて「・・・ごきげんよう。夏美さん。’」「そう

言い消えさった。

残された夏美は翡翠刀を鞘に収めタバコに火を灯し「・・・何でエあっけなかったな。」

だが、めんどくさくなくていいな。と心の中で呟いた。

そして特捜部に戻ろうとしたその時・・・。

‘気配を感じた。’ 何かの気配を・・・。

だが、夏美が振り替えた時にはその気配は消えていた。

夏美タバコ吸いながら「・・・気のせいかな?」そう言い今度こそ戻った。

その様子をいつの間にか見ていて小十郎が見ていてニヤリと笑い「・・・良い勘してるな。」もうすぐ会いに行つてやるぜ? 夏美」とても楽しそうに呟いていた。

第1夜。プロローグ。ワカバ特捜部。完。

第1夜。プロローグ。ワカバ特捜部。（後書き）

有難うございます。

其れではほぼ毎回？ですがグタグタ予告風をどうぞ笑

アレから夏美はずっとずっと・自身の部屋でソファ―に座りタバコを吸いながら考えていた。

そして「・・・まさか。あいつ等も動いていたなんてな。」

と続け様に「・・・あの方らしき 気配もした。まさか・・・。」

そして苦笑いしながら「・・・なんて、考えてもらち空かないな。」
そう言い

テーブルの所に置いた灰皿でタバコをもみ消しソファ―に寝っ転がって目をつむった。

すると「・・・クク、無謀丸出しじゃねえか。’, 夏美。」

夏美その声を聞き一瞬目を明け辺りを見渡した。

けど「・・・？」

あたりを見渡すと、誰もいなかった。’,

夏美は首をかしげて「・・・気のせいかな。」と呟き再度ソファで寝っ転がって眠った。

すると、いつの間にかそばに小十郎がいた。

小十郎は夏美の頭を自分の膝に乗せニヤリと笑い「お休み俺の夏美、もう逃がさねえぜ？」と頭をなでながら楽しそうにつぶやいた。

夏美「第2夜。夏美と小十郎ついに再会？」

「次章もどうぞよろしくな？」

以上です。ありがとうございます。

第2夜。夏美と小十郎ついに再会？（前書き）

ありがとうございます。

今章はですね。おもに夏美を中心として書かせていただく予定です。

長丁場など予定です。こちらも。

注）特殊純血はあくまでも此方のオリとしての設定ですので・・・。
御了承下さい。

（咬んだ人間の傷跡にいやでも自然に血が流しこんで己の仲間にしてしまうという個人設定）

それではどうぞ。

第2夜。夏美と小十郎ついに再会？

アレから夏美はずっとずっと・・・自身の部屋でソファ―に座りタバコを吸いながら考えていた。

そして「・・・まさか。あいつ等も動いていたなんてな。」

と続け様に「・・・あの方らしき 気配もした。まさか・・・。」

そして苦笑いしながら「・・・なんて、考えてもらち空かないな。」
そう言い

テーブルの所に置いた灰皿でタバコをもみ消しソファ―に寝っ転がって目をつむった。

すると「・・・クク、無謀丸出しじゃねえか。’, 夏美。」

夏美その声を聞き一瞬目を明け辺りを見渡した。

けど「・・・？」

あたりを見渡すと、誰もいなかった。

夏美は首をかしげて「・・・気のせいか、。」と呟き再度ソファ―で寝っ転がって眠った。

すると、いつの間にかそばに小十郎がいた。

小十郎は夏美の頭を自分の膝に乗せニヤリと笑い「お休み俺の夏美、もう逃がさねえぜ？」と頭を

撫でながら呟いた。

夏美は小十郎がそばにいるともつい知らずに眠り続けていた。

と同時に狂そしてその他の吸血鬼達も入り小十郎に合図して小十郎は頷き夏美を抱えその場を後にした。

「お前は、闇だ。闇からは逃げられねえよ。」

その声を聞き夏美は思わず目を覚ました。

と同時に体をソファーから起こし冷や汗をかいた自分を見て驚き頭をクシャと手でやり「・・・夢か？」と言いきり「・・・ある意味嫌な夢だね。」と笑いながらタバコに火を灯して

言った。

そして夏美のタバコの煙が宙に舞うと同時に雷外が現れて「姉御。」

夏美はそれを聞いて「・・・、仕事、か??雷外?」

雷外頷き「お仕事、だよ。姉御。」

夏美は頷き翡翠刀、ギンガその他の武器を持ち上着を羽織りフツと笑い「了解っと!!」言いその場を後にしようとしたその時雷外は「・・・姉御。気をつけて?、特殊純血のあの男、がいる。」

夏美はそれを聞いて両目を見開き驚いた。

「・・・あの人がいるだ??馬鹿な。だってあの人は・・・片倉様達と戦ってもう、散ったはずじゃア、何故だ?????と自分自身にいつの間にか問いかけている自分がいた。」

夏美は苦笑いしつつ雷外を見て「ありがとうよ。お前さんもな?」
「そういう部屋を出て行った。」

雷外はそれを見て夏美を心配そうに見つめていた。

夏美はアレから廊下を歩き続けていた。

「・・・特殊純血か。」

「夏美」

金銀二つの瞳を持つ男。鳳凰崎醍醐ほうおうきだくご。漆黒の髪に・・・漆黒のスーツに身御包んだ男。特殊純血にはいる吸血鬼だ。

夏美軽くため息をついて「・・・醍醐さん。貴方は一体何を御望みなんです？」と小さくつぶやいた。

と同時にライカと鉢合わせして「・・・仕事か？相棒？」

夏美頷き「私しゃアがない間。ワカバ頼んだ。」

ライカ頷き「了解つと。無理するなよ？相棒？醍醐の奴がお前さん

を嗅ぎまわっている。後・

片倉の旦那様方もな。」

夏美タバコを加え直してフツと笑い「承知した。あんがとよ。じやな。」そう言い特捜部を出て行った。

ライカはそれを見て「・・・無茶するな？ 相棒。」と呟いていた。

一方、夏美は外の見回りをしていた管轄内の。（夏美のお仕事は管轄内の見回り今の）

夏美辺り見渡して「・・・今の所異常なし、だな。」と同時に一瞬何かの気配を感じたのか夏美は素早く懷からギンガを取り出し「誰だい！？ 其処にいるのは！！！！出てきな！！？」

すると女の声で「流石ね。炎龍。素早く感ずるとは・・・昔の勘は鈍っていない様ね。安心したわ。」

その声を聞いて「お前は・・・龍^{ドラゴン}！！！！」

夏美の嘗ての闇の相棒の一人であった龍がいた。

そして遠目で小十郎に命令された狂が夏美を監視していた。

狂はその様子を楽しそうに見て「・・・片倉の兄貴が氣にしているわけだ。」と呟いた。

第2夜。夏美と小十郎ついに再会？完。

第2夜。夏美と小十郎ついに再会？（後書き）

有難うございます。

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告風をどうぞ。笑

アレから見回りの仕事で管轄内を見回っていた夏美。

だが・其れとは裏腹に異常なしと思われた管轄内に急きよ嘗ての闇の相棒の一人であった龍が現れた。

夏美は顔しかめつつも「・・・何しに来た？龍？」

龍はクスと笑いながら「相棒に会いに来ちゃアいけないのかしら？」

夏美はその事を聞いてフンと笑い「私しやアは、今の仕事で忙しいんだ。」
昔の事を構ってられないんだよ。其れに、私しやアが今、引退、した事しているんだろ？」

龍はそれを聞いてまるで納得しない顔で「・・・どうして？表で生きようとするの？貴女は元々、闇でしょ？」

夏美はそれを聞いて「・・・私しやアは元々表の人間さ。」と呟き龍を見て「・・・大方、あいつに言われて様子見に来たんだろ？」

龍はそれを見て再度クスと笑い「・・・正解。」と同時に「別にやりあいに来たわけじゃないわ。安心して・・・只の様子見。」

夏美はそれを聞いて「・・・あいつに伝えておけ。もう戻らんな。」

龍はそれを聞いてクスと笑い「後悔は？」

夏美はタバコを再読日加え直して「・・・別に元々表だから良いだろ？」

と再度言った。

龍はそれを聞いて何も言わずに立ち去った。

夏美はそれを見てタメ息をつき「・・・ご苦労さんだな。こんな所までよ。」そして再度見回りをし、異常がないと確認し特捜部に戻ろうとした次の瞬間。

行き成り背後から何者かに抱きしめられる。

夏美は驚き思わずタバコを落としてしまった。

と同時にクククと笑いながら「ああ。もったいねえな、そうわねえか？」

夏美？。」

その声に夏美は、聞き覚えがあった。

夏美はその声を聞いて「・・・か、片倉様？」と振り向きながら言った。

すると小十郎がニヤリと笑い「よォ。夏美。ようやく会えたな？」

夏美は只驚いていた。

そして・・・。

‘あア、夢が違った形だけど現実に・・・。なって、と呟いていた。

夏美「第3夜。夏美と嘗ての闇の相棒の1人龍との再会そして・・・夢の現実。」

「次章もどうぞ宜しくな？」

以上です。有難うございます。

第3夜。夏美と嘗ての闇の相棒の1人龍との再会そして・・・夢の現実。

（前書き）

有難うございます。

今章はですね。主に嘗ての相棒の1人（闇の）であった龍との再会を主に

夏美自身が小十郎との再会を書かせて頂こうと思います。

尚此方も長丁場の編集可能性ありの予定ですのでご了承ください。

第3夜。夏美と嘗ての闇の相棒の1人龍との再会そして・・・夢の現実。

アレから見回りの仕事で管轄内を見回っていた夏美。

だが・・・其れとは裏腹に異常なしと思われた管轄内に急きよ嘗ての闇の相棒の一人であった龍が現れた。

夏美は顔しかめつつも「・・・何しに來た？龍？」

龍はクスと笑いながら「相棒に会いに來ちゃアいけないのかしら？」

夏美はその事を聞いてフンと笑い「私しゃアは、今の仕事で忙しいんだ。」

昔の事を構ってられないんだよ。其れに、私しゃアが今、引退、した事しているんだろ？」

龍はそれを聞いてまるで納得しない顔で「・・・どうして？表で生きようとするの？貴女は元々、闇でしょ？」

夏美はそれを聞いて「・・・私しゃアは元々表の人間さ。」と呟き龍を見て「・・・大方、あいつに言われて様子見に來たんだろ？」

龍はそれを見て再度クスと笑い「・・・正解。」と同時に「別にやりあいに來たわけじゃないわ。安心して・・・只の様子見。」

夏美はそれを聞いて「・・・あいつに伝えておけ。もう戻らんな。」

，
」

龍はそれを聞いてクスと笑い「後悔は？，」

夏美はタバコを再度口に加え直して「・・・別に元々表だから良いだろ？」

と再度言った。

龍はそれを聞いて何も言わずに立ち去った。

夏美はそれを見てタメ息をつき「・・・ご苦労さんだな。こんな所までよ。」そして再度見回りをし、異常がないと確認し特捜部に戻ろうとした次の瞬間。

行き成り背後から何者かに抱きしめられる。

夏美は驚き思わずタバコを落としてしまった。

と同時にクククと笑いながら「あア。もったいねえな，そう思わねえか？夏美？」

その声に夏美は「聞き覚えがあった。」

夏美はその声を聞いて「・・・か、片倉様？」と振り向きながら言った。

すると小十郎がニヤリと笑い「よオ。夏美。ようやく会えたな？」

と同時に小十郎は夏美を自分の所に振り向かせ抱き寄せた。

そして耳元で「今忘れたい・・・」と思ったんだろう？」

その事を聞いて夏美は両目を見開いて驚いた。

小十郎はそれを見てクククと笑い「・・・お前は忘れられネエよ。
’俺の事何ざアな。’」と続け様に「まア・・・忘れさせるつもりもさらさらねえんだがな。’」

夏美は顔しかめて「・・・片倉様。どうしてそつとしておいてくれないんです???」

小十郎はそれを聞いてフツと笑い夏美を再度抱きしめて「・・・俺のお気に入りこそう簡単に手放すかよ。’」と言った。

夏美は只只・・・小十郎の腕の中に浸っていた。

・・・懐かしい匂い。’気持ち良いな・・・’

すると夏美の所に無線がいきなり入って来て報告受けて夏美は驚き

軽く舌打ちし「・・・片倉様ごめんなさい。‘緊急事態’なので。」
そう言い潔く小十郎の所から離れて特捜部へと戻って行った。

小十郎はそれを見て只見送るしか出来なかった。

そして「・・・夏美。」

「今のお前は何を想い何を願い生きている？」――

「表の生活（人間は楽しいか？）――」

そして夏美は小十郎のその声も聞こえず只只走りまわっていた。

夏美汗かきつつも「・・・広州の討伐上層部隊。そして、特殊ダム
ピール討伐教会上層部隊。か！

メイラン奴そして・・・刃金（ハガネ特殊ダムピールの討伐教会会長）
の奴め！ついに、しびれ切らしたか！？」

クソ！！間にあってくれよ！！！！

相棒達！そして・・・椿！！茜！！！！早まるんじゃねエぞ！！！！！！

!!!!!! そう心の中で呟きながら

走り続けていた。

と同時に夏美が走る姿を・・・遠目で見ている蒼い瞳を持つ女瑠維特^{ルイ}殊純血の1人。

瑠維軽くため息をつき「・・・貴女はいつもそうなのね?」
「仲間自身を想いそして必死に間に合わせようとする。」
「そう・・・昔のようにもう『失いたくない』『失うのが怖い』その心を想いながら・・・」
「そしてフツと笑いながらも「・・・其れでも愛おしいのよね。」「夏美。」「」

「瑠維様!!!!!!」

貴女は覚えていないでしょうけれど・・・私はちゃんと覚えているわよ? 醍醐も貴女を・・・。

ちゃんと覚えているんだからね。散ったらだめよ? 貴女は『私達の大切な子』なんだから。

爆撃音がなり夏美の怒号が聞こえた。

「どけ!!! 邪魔するなアアア!!!!!! 燃やされなくなかったらなアアア!!!!!!」
「と。いう怒号と共に・・・。

第3夜。夏美と嘗ての闇の相棒の1人龍との再会そして・夢の現実。完。

第3夜。夏美と嘗ての闇の相棒の1人龍との再会そして・・・夢の現実。

(後書き

有難うございます。

無事に更新完了致しました。其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告風をどうぞ笑

アレから小十郎との再会を無事？に果たした夏美はワカバ特捜部の無線により緊急事態の連絡が入った。

そう、其れは特捜部の対立する二つの組織広州とそして特殊ダムピール討伐教会の上層部の連中が討伐部隊をワカバに派遣したからだ。

夏美はその二つの上層部の討伐部隊の連中の強さを自身で感じ取っているため相当強い事を知っていた。

其れと・・・父大樹母楓を散らせたのもこの広州の討伐上層部隊だった。

だが・・・夏美の前には特殊ダムピール討伐教会の連中が行く手を阻む。

夏美はそれを見て応戦し始めた。

「どけ！！！！燃やされなくなったらなアア！！！！！！！！」と同時に「すまないが・・・今の私しゃアには、手加減という言葉は無いからな！」そう言い火炎風拳の技を放った。と同時にその連中は散って行った。

夏美はそれを見て道が開いた事を確認し再度特捜部に向けて走り出そうとしたその時・・・兄様???」オウガの気が不安定な事を確認した。

そして迷わず走りだして心の中で・・・。

「頼む!!! 此れ以上奪わないでくれ!!! 私から・・・大切なものを!!!」と叫びながら走り続けた。

その様子を遠目で相も変わらず小十郎達が見ていてそして・・・瑠維が今度は醍醐を連れて見ていた。

そして醍醐夏美を見て「・・・やっと見つけた。俺達の子猫（夏美）ちゃん。」と呟いた。

でも・・・間に合うかな?。とも呟いた。

夏美は外にもかかわらず「兄様アアア!!!!!! どうかご無事で!!!」と叫んでいた。

瑠維「第4夜。ワカバ特捜部危機?」「次章も宜しくお願いしますね?」

以上です。有難うございました。次章も御付き合い頂ければ幸いです。

第4夜。ワカバ特捜部危機？（前書き）

有難うございます。

今章は前章の続きみたいなものです。

此方も長丁場の編集可能性等あり予定ですのでご了承ください。

其れではどうぞ。

第4夜。ワカバ特捜部危機？

アレから小十郎との再会を無事？に果たした夏美はワカバ特捜部の無線により緊急事態の連絡が入った。

そう、其れは特捜部の対立する二つの組織広州とそして特殊ダムピール討伐教会の上層部の連中が討伐部隊をワカバに派遣したからだ。

夏美はその二つの上層部の討伐部隊の連中の強さを自身で感じ取っているため相当強い事を知っていた。

其れと・・・父大樹母楓を散らせたのもこの広州の討伐上層部隊だった。

だが・・・夏美の前には特殊ダムピール討伐教会の連中が行く手を阻む。

夏美はそれを見て応戦し始めた。

「どけ！！！！燃やされなくなかったらなアア！！！！！！」と同時に「すまないが・・・今の私しやアには、手加減という言葉は無いかな！、」そう言い火炎風拳の技を放った。と同時にその連中は散って行った。

夏美はそれを見て道が開いた事を確認し再度特捜部に向けて走り出そうとしたその時・・・「・・・兄様？？？」「オウガの気が不安定な事を確認した。」

そして迷わず走りだして心の中で・・・。

「頼む……！此れ以上奪わないでくれ……！私から……大切なものを……！」と叫びながら走り続けた。

その様子を遠目で相も変わらず小十郎達が見ていてそして……瑠維が今度は醍醐を連れて見ていた。

そして醍醐夏美を見て「……やっと見つけた。俺達の子猫（夏美）ちゃん。」と呟いた。

でも……間に合うかな？。とも呟いた。

夏美は外にもかかわらず「兄様アアア……！……！どうかご無事で……！」と叫んでいた。

そしてやみくもに只只無事を祈りながら走り続けていた。

「頼む……！此れ以上私しやアから奪うな……！……！……！……！」

父さん達（大樹楓）と約束したんだ……！……！……！

あの時、散ったあの日から・・・護ると！！！！ワカバを！！！！

―夏美。ワカバをお願いね？―

―頼んだぞ？過酷かも知れんが・・・。ワカバをそして有理を・・・。

父さん達！！！！

そして・・・。

―姉さん！！！！俺！姉さん達の相棒（仲間に）慣れて嬉しかったっス！！！！これからも宜しくっス！！！！―

夏美顔しかめつつ「龍儀!!（りゅうぎ）」

「お、俺・・・姉さんの側にいて嬉しかったっすよ。有難うございました。」

とある日微笑みながら散る夏美の弟分。雷外とおなじような・・・。

そして・・・。

ドオオオン!!!!と爆発音がした。

そして野次馬達が「お・・・オイ! ありゃアワカバじゃねエ?」とざわめついた。

と同時に夏美自身も慌てて駆け寄り光景を間の渡りにした。

其処は特捜部が爆破されていて少しだけかけていた。

夏美は慌てて特捜部に入ろうとした。

だが「あ、あぶねエって!! 嬢ちゃん!」と男に止められる。

夏美はその男に「離して下さい!!! 私しやアは此処のリーダーです!! 様子を見に行くんです!!」

そう言い振り払って特捜部内に入って行った。

頼む!! 此れ以上!! なくさないでくれ!!

すると夏美の姿を確認したワカバの特捜部員が「橘様アアア!!!」
「リーダー!!!」 「姉さアアアん!!!」

とさまざまな呼び声で夏美を呼んだ。

夏美自身も其れを聞いて慌てて行く。

クソ!!!!!!!!!! 私しゃアはまた、護れねエのか!?、大事なものを
!!!!

ー夏美ー

首領であるオウガの顔が浮かぶ。

夏美は兎に角無我夢中で走り続けていた。

と同時に討伐教会の連中が出てきて夏美の道をふさぐ。

夏美はそれを見て凄い形相で「どけエエエエ!! 今てめエ等の相手
するほど暇じゃねえんだよ!!」そう言いながら雷月を鞘から取り
出し「唸れ!!! 轟け!!! 雷神!!!!!!」と雷神をくらわした。

そして何事もなかったかのように去って行った。

夏美「・・・クソ！兄様！！皆！！！！どうか無事で！！！」

そして中に入りオウガの部屋の中に入った。

次の瞬間夏美が見たのは血だらけになってうつ伏せになっているオウガの姿だった。

第4夜。ワカバ特捜部危機？完。

第4夜。ワカバ特捜部危機？（後書き）

有難うございます。

無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風？をどうぞ（笑；）

少々残酷シーン等入る予定です。ご了承下さい。

アレから緊急事態の一報を受けワカバ特捜部に戻った夏美が見たものは

血だらけになってうつ伏せになっているオウガの姿だった。

夏美はそれを見て「・・・あ、あにさま？？」そしてかすかに息をしている

事に気づき安堵すると同時にオウガを隣にある医務室まで連れて行った。

そして……。相棒達の確認を急ぐ……。

ロビーに急行した。

その時夏美が見たものとは？

夏美「第5夜。夏美ワカバ特捜部帰還そして・・・。」

「次章もどうぞ宜しくな？」

以上です。有難うございました。

第5夜。夏美ワカバ特捜部帰還そして・・・（前書き）

有難うございます。

今章は前章の続きみたいなものです。

尚此方の章に関しましては、残酷シーン等が今まで以上に？ある可能性もあります。

ので苦手な方はご了承ください。

今章も長丁場等編集可能性等あります。

第5夜。夏美ワカバ特捜部帰還そして・・・。

アレから緊急事態の一報を受けワカバ特捜部に戻った夏美が見たものは

血だらけになってうつ伏せになっているオウガの姿だった。

夏美はそれを見て「・・・あ、あにさま??」そしてかすかに息をしている

事に気づき安堵すると同時にオウガを隣にある医務室まで連れて行った。

そして・・・。相棒達の確認を急ぐ・・・。

ロビーに急行した。

その時夏美が見たものとは？

夏美は辺りを見渡し、驚いていた。

辺りはすっかり・・・。

血だまりが多くなっていた。

血……。血……。血だまり。

夏美はその血だまりの中を駆け巡る。

「ライカアアア!!!! 相棒達イイ!!!! いたら返事しろオオオ!!!!
!!!!」と叫んでいた。

何処だアアアアア!!!!!! 何処にいるんだアアア!!!!!! た、頼
むから無事でいてくれ!!!! と願った。

何処だ!!!!!!? 何処にいる!!!!!!? つか返事してくれ……。頼
む!!!!

クソッ!!!!!! 血の匂いで……。眩む。目が……。体が……。

「夏美、お前は元々闇の者だ。こっちに戻って来いや。」

止めて下さい！お願いだから！！此れ以上かき乱さないで！！！！

片倉様ッ！！！！！！

と同時に頭を抱えがくりとその場に倒れ込んだ。

・・こうしている場合じゃないのによ。

しっかりしろ！私しやア！！！！前を向け！！！！あるけ！！！！！！！！

そう自分自身に言い聞かせながら少しずつ立ち上がりあるきだした。

血の匂いが鼻をついていた。

と同時に夏美はその場に入って来た。

「ん・・な。」其処は辺りはすっかり血の海だった。

血・・・血・・・血だまり。

そしてこの事をするの目に見えているのが「・・広州^{メイラン}」

クソ！また私しゃアから奴らはすべてを・・・葬り去るのか！！？

すると狂が現れて「あアゝずいぶんと派手にやられてたなア。オイ。
」

夏美はそれを着てすばやく翡翠刀を抜き狂の前に刃を突き付けた。

狂はそれを見て口笛を吹きニヤリと笑い「おっかねえな。」

夏美は顔しかめて「何しに来た！？それとも兄さんも私から奪いに来たのか！？」

狂はそれを聞いてフツと笑いながら「・・・嬢ちゃん何を勘違いしているのかしらねェが・・・俺ァ片倉の兄貴の仲間だぜ？」

夏美はそれを聞いてピクとなった。

・・・見張りをしていたのか？この私しやアの事を。――

狂は夏美のその様子を見てククと笑い「・・・ずいぶん派手にやられたなァ？」

夏美は顔しかめてタバコに火を灯し「・・・何が言いたいんです？」

狂は夏美を見てクツと笑い「・・・お前ェさんの大切なもん。」と楽しそうに呟いた。

夏美はそれを聞き、頭に血が上ってしまったのか、狂に向かって一斉に斬りかかって来た。

狂はそれを見て苦笑いし「・・・片倉の兄貴から、傷つけるな、ッて言われているのによォ。しょうがねえな。」そう言い村正を取り出

し翡翠刀を受け止めた。

そして夏美は狂を睨みつけて「アンタに何が分かる！！！！？」
‘大切なものを護れなかった悲しみと苦しみが！！大切なものにむごい捨てられ方をした悲しみと怒りが！！！！！！’
‘、’
「そう言い放った。

其処には、
‘憎しみの紅の瞳が夏美の瞳の中に宿って行った。
、’

第5夜。夏美ワカバ特捜部帰還そして……。完。

第5夜。夏美ワカバ特捜部帰還そして・・・（後書き）

有難うございます。

大変に遅くなりましたが無事に更新完了できました。

其れではほぼ毎回？のグタグタ予告風をどうぞ（笑）

アレから、ワカバで狂と鉢合わせをして狂に大切な相棒達がやられた事を

指摘されていつの間にか頭に血が上り翡翠刀で斬りかかっていた。

その眼には、‘憎しみを帯びていた紅の瞳の色になっていた。’

狂はそれを見て両目見開きながらもニヤリと笑い「・・・ほオ。’」
と楽しそうに呟いていた。

一方、討伐部隊達に襲撃を受けながらも何とか軽症で済んだライカが夏美を心配になり夏美を追う。

刀音があちらこちらに響き渡る。

ライカ「・・・刀音??」まさか???

そう呟き音がすると思われる所に急ぐ。

と同時に「相棒!!!!!!!!!!」とその場所に入って行った。

ライカが目にしたのは刀を交わっている夏美と狂だった。

ライカ「第6夜。夏美VS狂。そして・・・。」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。有難うございます。

第6夜。夏美VS狂。そして・・・（前書き）

今章もご覧頂きありがとうございます。

今章は、前章の後半みたいなものです。

今章もほぼ毎回ですが長丁場の編集可能性等あり予定ですのでご了承ください。

第6夜。夏美VS狂。そして・・・

アレから、ワカバで狂と鉢合わせをして狂に大切な相棒達がやられた事を

指摘されていたの間に頭にか頭に血が上り翡翠刀で斬りかかっていた。

その眼には、
‘憎しみを帯びていた紅の瞳の色になっていた。’

狂はそれを見て両目見開きながらもニヤリと笑い「・・・ほオ。」
と楽しそうに呟いていた。

一方、討伐部隊達に襲撃を受けながらも何とか軽症で済んだライカが夏美を心配になり夏美を追う。

刀音があちらこちらに響き渡る。

ライカ「・・・刀音?」まさか??

そう呟き音がすると思われる所に急ぐ。

と同時に「相棒!!!!!!!!!!!!!!」とその場所に入って行った。

ライカが目にしたのは刀を交わっている夏美と狂だった。

ライカは夏美の闘っている姿を見てひとまず安どした。

相棒無事だったんだな。良かった。

しかし・・・ライカは夏美の様子がおかしい事に気が付く。

ライカ「・・・!!!!!!」

其処には深紅の瞳を帯びていた夏美がいた。

ライカは軽く舌打ちして

・・・あいつ何時の間に炎龍^{アレ}化していたのかよ!? マジイな・・・。

こうなるとアレだ。厄介だぞ！！！！！

夏美は、翡翠刀を持ち「……翡翠流、爆風烈風弾！！！！」と技を放った。

と同時にククと笑い「……オイオイ。何時からおっかなくなっちゃまったんだ？夏美？其れに俺の大事な仲間は何てことしてくれるんだ。」

狂の前に小十郎が出てきていた。

狂は驚いて「……片倉の兄貴！？何で！？」

小十郎ニヤと笑い「よォ。狂。大丈夫かよ？いやな……ちいと、嫌な予感がしたから、来たんだよ。」

と同時に夏美の額から汗が滴れる。

ライカはその様子を見て夏美の所に行き「もういい！！相棒ッ！！止めろッ！！このままでは、お前エさんがお前エさんで無くなっちゃう！！！！！！」

小十郎達はその言葉を聞き・・・互いに顔見合せていた。

そして夏美は、再度息切れしながらも「・・・相棒。今の私に近づくな・・・。危ねえからよ。」と

ライカに対して自身から離れるよう促す。

其れは、まるで・・・、闇の始末屋の頃の自分に戻り替わりしていそうな気がして、

ライカは「・・・でもよ。」

夏美は顔しかめつつも「・・・このままだといつ私しやアがお前エ
さんを傷つけるか判らねえ!!!!」早く行けッ!!!!!!」と同時に
ドクン!!!!!!と心音になった。

そして、私しやアの中で心音になり・・・そして、パリンつと音
がして、何かがはじけた。

いつの間にか紅の竜の刺青が自身を支配しそして自身の瞳がいつの
間にか紅の色を示していた。

夏美は、無言のまま小十郎に向かって斬りかかった。

ライカはその様子を見て焦りそして驚きながら軽く舌打ちして「戻
れ!!! 相棒!!!!!! 戻るんだ!!!!!!」

「そのライカの声も今の夏美には届かなかった。」

‘其れはまるで只の人形’、という言葉が似合っていた。

闇よ闇よ闇の子よ。闇の紅の竜よ。戻りたまえや。

ライカは氷棒を持ちながら軽く舌打ちして「・・・本当なら手荒なまねはしたくねェんだが仕方ねェ。

すまねえ！！！！相棒ッ！！！！」そして氷棒で夏美の腹の溝を強く押して行った。

夏美は一瞬我に戻りフツと苦笑いをして小声で「す、すまねえ。相棒。助かった。」と呟いて気を失った。

ライカはその様子を痛々しそうな顔をして「・・・すまねえな。相棒。」とぼそつと言い夏美を担いで

狂達に一礼してとりあえず別室へと運んで行った。

第6夜。夏美VS狂。そして・・・完。

第6夜。夏美VS狂。そして・・・（後書き）

有難うございます。ドン更新ではありますが無事に更新できました。これからもゆっくりではありますがやって行きたいと思しますのでどうぞ温かい目で引き続き見守って頂ければと思います。

其れでは予告篇です。

アレから夏美は鬼眼の狂達と戦って炎龍状態になってしまった。

其処でたまたまいたライカが炎龍状態の夏美を何とか止めて部屋に連れて行った。

小十郎達はそれを只黙って見ていた。

一方、ライカに抱えられていた夏美は部屋に連れて帰られてそしてベットへと寝かされていた。

ライカは夏美を見てそつと頭を撫で「・・・すまないな。相棒チイと手荒なまねしてしまったよ。」と言い「また後で様子見に来るな。」と言いつき残しとりあえず、夏美の側を離れた。

と同時に入れ替えで何と次には別の特殊純血で吸血鬼界の凶王死神三成が入って来ていた。

そして、夏美の側により腰をかけて、眠っている、夏美の頬を軽く撫でながら「・・・でかくなったな。、夏美。」と嬉しそうに呟っていた。

夏美は、気づかずに寝返りを打っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5686r/>

闇の中に生きる蒼き雷龍とその‘女達’とその後・・・

2011年11月13日14時42分発行